

(東京 男性)

■マルチな活動は感心させられます。岩手は宮沢賢治も忘れられない人で、新平氏は水沢の誇りです。(岩手 男性)

■一流の方々が様々な角度から後藤新平という一人の人物を語るのを聞かせて頂き、勉強になりました。松田昌士氏のお話は同じ道産子として共鳴いたしました。(神奈川 女性)

■面白い話を伺い楽しい時間が過ぎました。後藤新平の本、考え方、思想が若い人に益し、今後の日本の行き方を方向づけると信じます。(東京 男性)

■台湾に旅行したとき許文龍という方から八田与一とともに尊敬する日本人として紹介された。司馬遼太郎の書物を読んだりして関心が高まり、参加することにした。(千葉 男性)

■日米中という構造の中で、どう後藤の世界戦略が組み立てられたのかをもう少し知りたかった。前回以来どうしても「後藤のリーダーシップ力がどう築かれたか」という人間論になりがちではないか？(東京 男性)

■参加の先生方が非常によかった。後藤新平に対する理解、評価を多面的にいっぺんに聞くことができて有益だった。(東京 男性)

■後藤新平の人となりが多々理解出来たが……会場からの声もあっても良かったのでは！(福島 男性)

■塩川正十郎先生の教育と宇宙船のお話。今の政治家も後藤新

平のように勉強して欲しいと思いました。(東京 男性)

■それぞれの研究者、専門家の発言が面白く良いシンポジウムでした。残念だったのは聴衆からの質問時間がなかったことです。後藤新平ではないですね。(東京 男性)

■どのパネリストも十分な準備をされており、学ぶ点の多い会であった。現代との時代背景、社会体制、政治体制の違いを十分に把握した上で、後藤新平から学ぶべき点を研究したいと思つた。(山梨 男性)

■現代の政治家を見ていると政治家にはなりたくないと思えます。けれども政治家は必要です。選ぶのは私たち一人一人、後藤新平さんのような方が出現されるでしょうか？(東京 女性)

■北満ハルビン(生れ)の小学校の講堂の両脇に、左に伊藤博文右に後藤新平の大きな大きな写真が掲げてあったのが子供ながらよく覚えてます。それに魅かれて、塩川先生の仰せのように、今こう云う後藤新平のような政治家がいいたら、と残念でなりません。(東京 女性)

■基本は、人間の育成なのだ、と改めて再確認しました。また、明日から新たな気持ちで生きていける自分がいます。ありがとうございます。(埼玉 女性)

●今はなき、大連の後藤新平像の建設の経緯とは？

植民地統治と人間崇拜 日本とドイツの植民地における銅像

はじめに

日本とドイツは近現代史において様々な点で共通しているとよく言われている。この両国のみならず、ほとんどすべての近代国民国家で共通しているのは人間崇拜、すなわち国家の成立過程において重要視される英雄、創設者、あるいはネーションの祖先の崇拜である。この小論では、近代ドイツと日本の歴史記憶における人間崇拜、とりわけ銅像建立という手段を考察していきたいと思う。そのなかで、植民地支配の一環として、ドイツと日本の植民地において建立された銅像に焦点を当て、特に戦前の大連における後藤新平の銅像の建設過程とその背景を明らかにしたいと思う。

ドイツの銅像

ドイツの場合、一九世紀前半、つまり「ドイツ」がまだ国として統一されていなかった時期に、その諸邦にナショナリズム運動が起こり、「ドイツ」というネーションを代表する者を記憶・表彰・顕彰するために、様々な記念碑・銅像が建立されるようになった。人間の銅像・石像などを建立する習慣はヨーロッパの古代に遡るが、中世では一度断絶し、近世に入ってから再開されたのである。しかし、一九世紀以前に建立された銅像は領主に限られ、支配者以外の銅像の建立はほぼ皆無であった。一九世紀に入ると、ナショナリズム運動の産物として、ドイツでは例えば代表的文化人とされるシラーの銅像(その最初はシュ

(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部助教 塩川正十郎)

サーラ・スヴェン
Sven Sträter

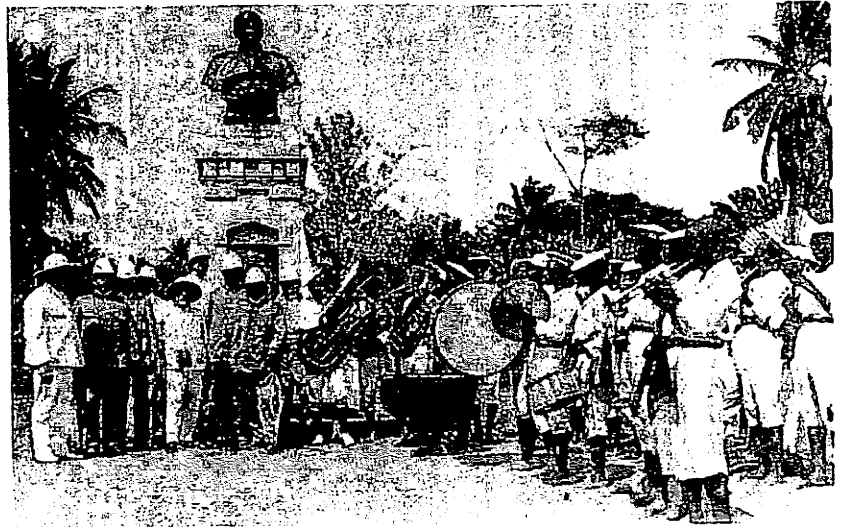


写真1 タンガにおけるビスマルク像の除幕式

トゥットガルトにて一八三九年建立)、そしてゲーテ(フランクフルトにて一八四四年建立)、軍人であるブリュッヘル將軍(ロストックにて一八一九年建立)、さらに神話的存在であったゲルマニアの銅像(リューデスハイムの近くに一八八三年建立)とヘルマン銅像(一八三九年着工で一八七五年完成)が相次いで建立された。ネーションの祖先、その代表者、そしてその英雄と象徴の銅像である。一九世紀後半にドイツ帝国が建國されると、その帝国の創設者として尊敬されたビスマルク首相の崇拜が広がり、ビスマルク銅像・石像と「ビスマルクの塔」が数多く建設された。銅像と石像(馬上像、立像、胸像を含む)だけで三〇〇体、いわゆる「ビスマルク塔」を含めると七〇〇体を越えるという(一八六九年から一九三四年の間建設)。これらの記念碑が建設されたのは、ドイツ帝国の領土に限られなかった。カメルーンでは、現在まで一つのビスマルク塔が残っている(今は、灯台として利用されているようだ)。シカゴでも一九一三年にドイツ移民によってビスマルクの立像が建立され、南米のチリでも戦前ビスマルクの記念碑が存在した。しかし逆に、ドイツ国内においてビスマルクの記念碑が一体も建設されなかった地方もある。たとえば、ザール地方である。

旧「ドイツー東アフリカ」(現タンザニア)のタンガにおいて、一九〇六年六月二三日にビスマルク像の除幕式が行われた(写真1)。ドイツ帝国の創設者ビスマルクの銅像の建立によって、

ドイツ帝国は植民地支配の定着を誇示し、それと同時にその支配を安定化させる目的であった。しかし、冷静に考えると、植民地にまで、本国の歴史記憶を展ばすのは、大胆な作戦であり、やがて植民地を失えば「記念碑倒壊」を招く行動でもある。一九一九年のヴェルサイユ条約によってドイツがすべての植民地を失うと、やはり植民地における多くの記念碑も壊されたのである。

近代日本の銅像

日本の場合でも、近代国民国家の建設過程で、人間崇拜のための銅像が数多く建立された。一八八〇年から一九二八年まで八〇〇体にのぼる。ドイツとは異なり、日本の場合は数人の人間に限定されず、数多くの人間の多様な銅像がつけられた。明治前半期の伝説的なヒーロー(いわゆる維新の志士)、「日本人」の祖先とされる者、そして皇族関係者の銅像が多かった。しかし、ドイツのように、国家の中心的なシンボル、すなわち天皇の銅像の建立は実現しなかった。何度も計画があり、宮内省に許可願いが提出されたが、拒否されたのである。

明治時代の日本は公の空間を利用し、広場、公園、駅前、官庁前などにおいて、その国家の代表者を銅像というかたちで誇示した。明治後期からこの空間を占めたのが、明治国家の創設

者たち、つまり明治維新の遂行者たちであった。明治期を通して、ほぼ全国的に「銅像ネットワーク」が形成され、いわゆる「国史」が「国民」の目の前に展開されるようになったのである。銅像の建立それ自体のみならず、銅像の除幕式、建立後定期的に行われる銅像下での祝祭なども、言うまでもなくその演出政策の延長線上にあった。「人間」、「英雄」、「祖先」の公の場での出現が「国民」の共感、一体感を促し、まだ非常に抽象的で多くの「国民」にとって理解不可能だった「ネーション」という概念を身近なかたちにし、国民認識の形成に大きく貢献したに違いない。

当然ながら、このように銅像として公の場で展開されるのは、ネーションの代表、そのルーツを表す祖先であり、そのネーションのすばらしさを代表する者であった。このネーションのすばらしさを誇示は、国内のみならず、植民地領土に住んでいる「日本帝国臣民」に対してもなされた。よく知られているように、台湾、朝鮮、そして満洲でも日本の寺院が設立され、天皇崇拜が強制されたほか、満洲の戦場において日露戦争の戦死者を記念するための忠魂碑なども建設されていた。さらに、植民地には、銅像も建立されたのだ。

それらの銅像は日本帝国の崩壊とともに倒壊させられた。世界的に考えると、「銅像の倒壊」とは、時代変化(というよりも時代の終焉)を象徴的に表す事象である。一九九〇年頃のソ連



写真2 戦時下の銅像回収(供出)

「東京府庁の正面玄関で決戦下の大東京を脱んでいた太田道灌と徳川家康の銅像が、こんど銅像仲間にも率先して勇ましく出陣した。両銅像とも約百七十頁である」とある。(読売新聞)

日本植民地における銅像

が多くある。九段の大山巖像、萩の山県有朋像(戦前国会議事堂前にあったが、そこから井の頭公園に移動し、その後萩に移動された)、靖国神社の大村益次郎像などがその例である。

の民衆によるレーニン銅像の倒壊と、米軍によるサダム・フセイン銅像の倒壊をよく覚えている方も少なくないだろう。日本史においても、銅像の倒壊の瞬間が多くあったが、民衆と外來軍によって倒壊されることは珍しく、象徴的瞬間としてはあまり歴史に残っていない。まず、数多くの銅像が破壊されたのは、一九二三年の関東大震災である。その後、「国家総動員」のため、一九四三年以降、全国の数多くの銅像が回収(供出)され、そのとき存在していた八〇〇体以上の銅像のほとんどが姿を消した(写真2)。敗戦時に残った銅像の数はよく知られていないが、その後米国の占領政策で壊された銅像の数は少なく、「軍国主義的銅像」として指摘された銅像でも現在まで存在するもの

時代の変化・終焉を表す銅像の倒壊があったに違いないのは、日本の植民地においてである。台湾、満洲などにあつた銅像が敗戦に際して倒壊させられた例が多くあるが、その瞬間の写真、映像などは残っていない。後藤新平の銅像もその一例である。後藤は台湾総督府民政長官・南滿洲鉄道初代総裁などを歴任していたため、台湾と満洲両方に銅像があつた珍しい例である。台湾の銅像は一九一五年に児玉源太郎銅像と同時に建立され、満洲では一九三〇年に日本支配の拠点であつた大連に、巨大な後藤新平像が建てられた(写真3)。銅像だけで四メートル八五センチ(一六尺)、台石を含めて一二メートル以上(四〇尺)の高さだつた。現在、岩手県水沢市の水沢公園にある後藤新平の銅像は大連にあつた銅像の「ミニチュア版」であり、同じ朝倉文夫によって製作されたものである。

日本の植民地には後藤新平以外にも様々な銅像があつた。現

在まで残っているものはほとんどないが、戦前の旅行ガイドブック、そして記念葉書でその銅像を把握できる。その中で、割合に知られているのが新京の児玉公園の児玉源太郎銅像(一九三八年建立)であり、大連のヤマトホテル前の大島義昌陸軍大将の銅像(一九一四年建立)、そして大連の満鉄公園での小村寿太郎の銅像(一九三六年建立)であつた(写真4・5・6)。これらの銅像は言うまでもなく日本による植民地統治の重要な一手段であつた。台湾、朝鮮、満洲における国家神道の普及、神社の建設、そしてとりわけ満洲の戦場と町における忠靈塔、忠魂碑、記念碑などの建設と同様に、銅像の建設は日本帝国の歴史物語を「外地」に拡張し、植民地の建設者を表彰し、「内地」以外の「帝国臣民」にも帝国の「栄光」を誇示し、理解させるため建設されたと言えよう。神社、記念碑、銅像の建設によって、「国史」は「内地」の境界を超え、植民地にまで展ばされたのである。

大連における後藤新平の銅像の建立とその宿命

大連の星ヶ浦公園において、一九三〇年に建立された後藤新平の銅像建設計画がなされたのは、後藤がまだ生きていた一九二八年に遡る。その年、東京市麹町区の日露協会の中に銅像建設を進める事務所がおかれた。発起人の中には、田中義一、川上俊彦、児玉秀雄、中橋徳五郎、吉野又二郎がおり、建設委員

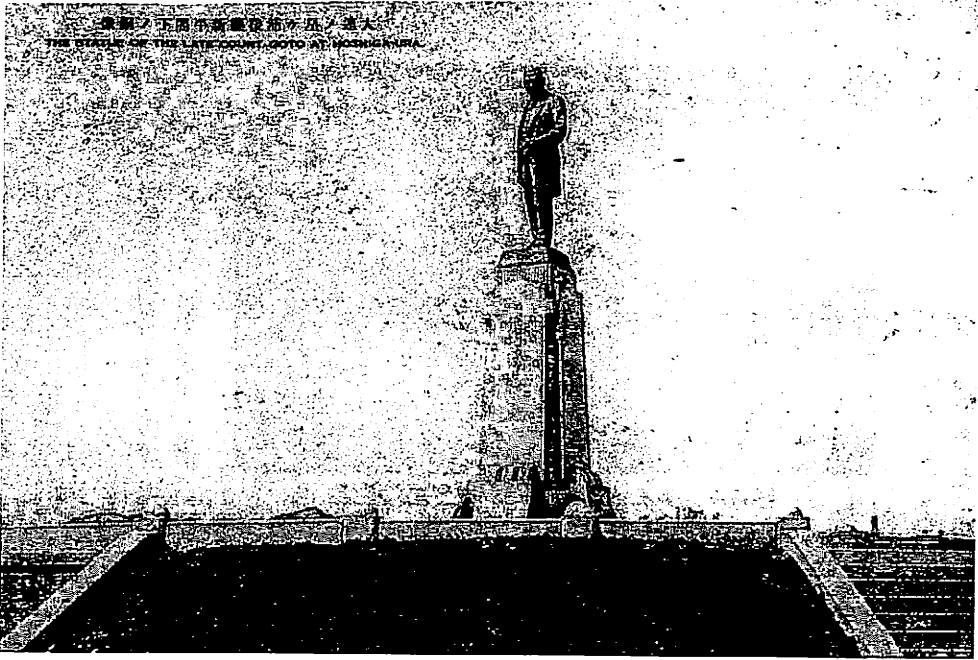


写真3 大連星ヶ浦公園の後藤新平像



写真4 新京・児玉公園の児玉源太郎銅像

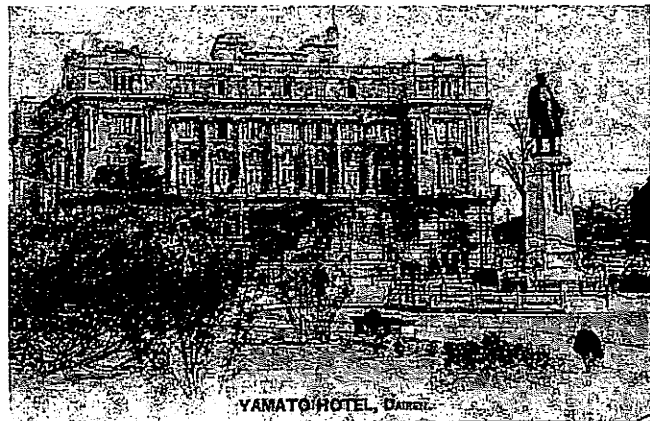


写真5 大連ヤマトホテル前・大島義昌陸軍大将銅像



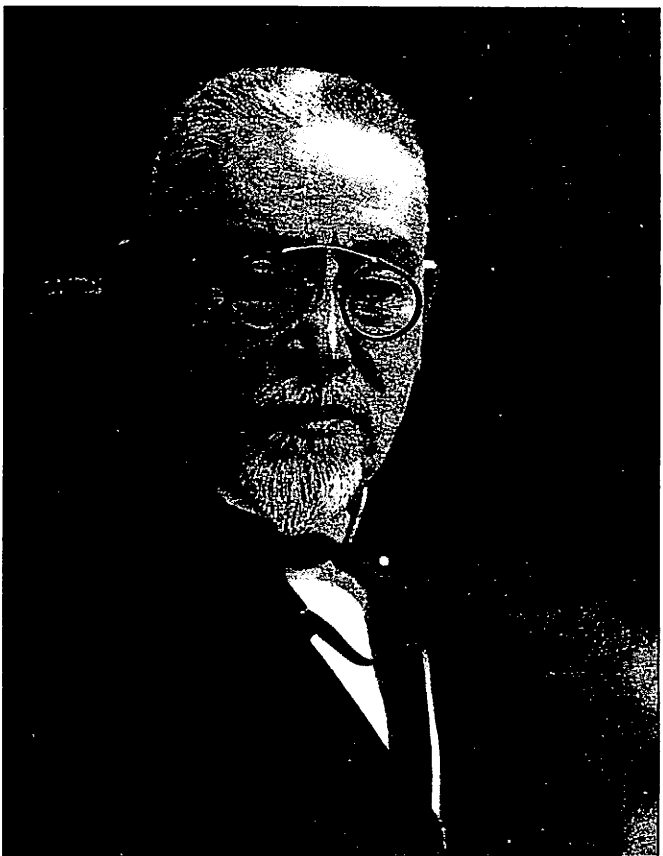
写真6 大連満鉄公園・小村寿太郎銅像

に入江政太郎、田中清次郎、佐藤安之助、松岡洋右など、建設委員長は第五代満鉄総裁の国沢新兵衛、発起人総代に前立憲政友会幹事長、当時（一九二七〜一九二九年）満鉄総裁（第十代）の山本条太郎が選ばれた。一九二九年に建設委員会が「建設趣意書」を作成し、「各方面ノ満洲縁者ニ発送」した。同年、後藤新平は亡くなったが、銅像の建設は記念銅像というかたちで進められた。後藤生前の遺志に基づいて、東京美術学校正木校長の推薦により同校教授の朝倉文夫に製作依頼が出された。同時に、銅像建設地として、朝倉の満洲調査の結果大連市星ヶ浦公園に決まり、満鉄もこの決定を承認した。銅像が一九三〇年に鑄造され、東京から神戸まで陸送、そして神戸からハルビン丸で大連まで運ばれた。台座は岡山県の石を利用し作られ、一九三〇年一〇月一二日に除幕式が実施された。

建設委員会の銅像建設趣意書によると、後藤伯は南満洲鉄道会社の設立に際し最初の総裁として満洲に赴任し、関東都督府顧問の要職を兼任し、「戦後経営の重任に膺り、能く百年の長計を樹立」し、「会社本来の使命の上に著大なる事跡」を残したので提案したとされる。後藤が「台湾における偉跡」と共に、満洲において「南満洲鉄道は欧亚連絡の機能を全うすると同時に東西文化の調和の融合をしてさらに容易ならしめ」そして共存共栄に貢献し、「文化の進展産業の発達」に貢献したことに「深く感謝の念を禁ずる能はざる所なり」と。よって、満洲に「多

少とも関係を有する」者が大連に銅像を建設するの議を發起し、後藤の「事跡の象徴として永くその偉徳を仰ぎ軌範を後世に伝へんとするの趣旨に外ならず」と趣意書で強調している。大連での後藤の銅像の建立は、水沢市水沢公園で一九一一年に建立された銅像、一九一五年台湾で建立された銅像、そして後藤が初代総裁を務めた東京放送局構内に一九二七年に立てられた胸像に続いて少なくとも四体目の銅像であった。

日本の銅像の多くの場合は、ほぼ寄付金によってその必要な費用が集まったが、一九二〇年代後半には経済不況のため、後藤新平の銅像建立のための寄付は期待通り進まなかった。報告書の判断で、それにもかかわらず「概して良好の結果を収めた」とされているが、実際銅像の建設費の大部分は南満洲鉄道株式会社（二万円）が負担し、五万四千元が一般寄付によって調達された。その一般寄付の中でもっとも大きな金額を出したのが、かつて山本条太郎が常務取締役を務めた三井物産株式会社（二万円）、その他に馬越添平氏（五千元）、東洋拓殖株式会社（三千元）、三菱合資会社（三千元）であった。寄付運動は内地にとどまらず、植民地にも広がった。特に植民地官僚、その中でとりわけ関東都督（旅順民政署、大連民政所、金州民政支署、その他の民政支署など）の寄付と南満洲鉄道株式会社の幹部の寄付が「寄附帖」のなかで目立っている。大連刑務所の職員からも二〇円の寄付を集めた。ドイツのナショナルリズム運動が一九世紀に起こ



後藤新平の会 会報

No.2

2006.12

事務局

〒112-0004 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三

(後藤原書店內)

電話 〇三(五)三〇三〇一

FAX 〇三(五)三〇四五〇

振替 〇〇一〇〇一四一五三三七一七

<http://goto-shimpei.org/>

(題字の後藤新平は自筆) 頒価 一〇〇〇円